

福井大学協定校への派遣留学（交換留学）月例報告書（10月分）

留学先大学：タイ・アサンプション大学

氏名：板谷 月紀

サワディーカー！タイ・アサンプション大学に留学している板谷月紀です。こちらの気候は常夏なので、もう10月が終わろうとしていることが信じられません…。今回は、アサンプション大学の授業とテストについて（8月の報告書でも触れましたが、もう少し詳しく！）、その他もろもろ細かいことについて（適当）、それから二泊三日で行ったマレーシア旅行についてお話ししたいと思います！

授業について

アサンプション大学の授業は1つにつき3単位で、留学生は12単位以上の授業を受けていないと留学生としてタイに滞在することができません。課題はほとんどなく、たまにディスカッションやプレゼンの課題が課されるくらいです。もっとも、違う授業を受けている友達は毎週課題に追われているので、授業の内容や先生によるのだと思います。私の方は課題もなくサークルもバイトもないので、「留学ってこんなに暇なのか」と驚くほどに暇な毎日を過ごしています（笑）。授業は1時間半のものもあれば3時間続きのものもあり、休み時間がない分、16時半にはすべての授業が終わります。先生方は英語が堪能ですが、少しタイ訛りが混ざっているので最初は聞き取るのにかなり苦労しました。大変なことも多いですが、タイ人は先生も学生も本当に優しく何かと助けてくれるので何とか頑張れています。

テストについて

テストの形式は少し日本と違って、まず学生証を持参し、公式の制服を着用していないとテストを受けることができません。さらに入室した人からテストを始めることができ、終わった人から退出します。中間テストは2時間、期末は3時間も充てられていますが、私はあるテストでは難しすぎて15分で退出しました（笑）。テスト内容は国際地域学部で受けていたものというよりは高校などでやっていた暗記型に近く、量が膨大なので大変です。テスト期間は長く、中間テストは2週間、期末テストは12月初めから23日まで続きます。私の場合は12月中に3日間しかテストがないので、実質2週間分の休みがあります。日本とは違い、テスト期間としてテスト勉強に専念できるのは有難いところです。

その他もろもろ

さて、この3か月間で経験したことの中で、これからタイに留学・観光しようかと考えている皆さんにお伝えしておきたいと思ったことを、ざっくりお話ししようと思います。

➤ 【入国スタンプ】まず1つ目ですが、留学初めにタイに入国した時、パスポートに入国

スタンプを押してもらって入国しました。ところがこの入国スタンプ、後で見返してみると「NON-ED (ビザの種類)」となっていなければならない所になんと「観光」のスタンプが押してあり、期限が1か月で切れてしまうので、早急に車で1時間半の空港まで赴く羽目になりました…。タイ人は仕事に対してかなり緩く、それ自体はある意味では日本と比べて良いところだとも言えるのですが、安心できそうな空港の管理官でもこういった間違いは多々あるようなのでタイに来たときは要注意です。

- 【コンセント】この留学は私にとって初めての海外渡航だったので、海外のコンセントの電圧が日本とは違うことなど全く頭に浮かびませんでした。そのため日本からドライヤーを持ってきてこれを使ってみたところ、ドライヤーが熱で赤く光りだして危うく爆発するところでした(笑)。携帯の充電器は使えますが、電圧によっては使えない電化製品がありますし、国によってはプラグの形が違う可能性もあるので注意してくださいね。
- 【ゴキブリ】タイではゴキブリが都会のど真ん中を颯爽と走り去っていく光景をよく目にします…。タイに来たときはお気を付けください(笑)。
- 【時間】これは私がタイに来てかなり驚いたことの一つなのですが、タイでは時間の数え方が日本とは違い、18時になると時間がリセットされます。例えば20時だと夜2時、23時だと夜5時、という風に数えるそうです。たいていは普通の数え方で伝わりますが、初期に知らずにバスの予約の電話をかけた時、話がかみ合わずに戸惑いました。
- 【タクシー】タクシーの運転手は基本英語が話せません。「Assumption University」と言っても伝わらないこともあります。気合で目的地を伝えるしかないです(笑)。さらに、メーターを使わない観光客向けのタクシーやトゥクトゥクに乗ると基本ぼったくられるので要注意です。

マレーシア旅行

10月中旬に3連休があったので、東南アジアに留学しているメンバーでマレーシア旅行に行きました！マレーシアは一言でいうと「緑豊かな大都会」。個人的に一番興味深かったのは、ユニークで近代的な建築物が多かったことです。



更に、

タクシーの運転手を含めほとんどの方が英語を話せるのでコミュニケーションには困りませんでした。様々な文化・人種・宗教が混在し共存していて、街を歩いているだけでマレーシアという国の歴史的背景がうっすら見てとれるような、そんな場所でした。

